

人生の転換期

C・G・ユング／鎌田輝男訳

『現代思想』

臨時増刊

特集 = ユング

1979年4月発行

人間がそれぞれの年齢でぶつかるさまざまな問題を論じること
は、おそらくこのほか手間のかかる課題であろう。なぜならこれ
は、揺り籠から墓場にいたる精神生活の総体像を描き出すことには
かならないからである。講演の枠内でこのような課題に応じるに
は、ごく一般的なスケッチにとどめるしかない。もちろん、この講
演の狙いは、それぞれの年齢段階の正常な心理を記述することでは
ない。ここで取り上げるのは、さまざまな「問題」である。さまざ
まな困難や疑惑や二面性、ひと言で言えば、答えがひとつに限定さ
れない疑問であって、その答えも決して十分確かな、疑いの余地な
きものとはなりえない。それゆえ、疑問符を付けながら考えなければ
ならないことも少なくないのである。さらに困ったことには、
ただごとく信するほかない場合や、ときには思弁を弄さなければな
らないこともあるだろう。

精神生活が、ただ実際の事柄から成り立っているにすぎないもの
であれば——普通未開の段階では事実そうである——有無を言わせ

が支配するところ、つねに動揺があり、異なった道の可能性がある
からである。ところが、異なった道が可能であると思われるとき、
われわれは、本能の確実な導きから逸脱して、恐れに身を引き渡し
たことになる。なぜなら、それまでは自然がいつでもその子供たち
のために行ってきたことを、今度はわれわれの意識が行わねばなら
ないからである。すなわち、迷わず断定的に決定を下さなければなら
ない。そして、まさにこのとき、われわれのプロメテウスのな獲
得物である意識は、結局、自然にはかなわないのではないか、とい
う、あまりにも人間的な恐れにわれわれは捉えられるのである。

問題というものは、こうしてわれわれを父も母もない孤独の中
へ、自然を喪失した寄る辺ない境いへと連れて行く。そこでは、わ
れわれは意識を、ただもう意識することだけを強いられる。ほかに
方法はない。自然の成行きにまかせるかわりに、意識的な決定と解
決をしなければならぬ。こうしてどの問題も、意識の拡大を可能
にすると同時に、他方ではまたいっさいの無意識的な幼児性と本能
的な自然性から強制的に人を引き離すことにもなる。この強制は、
きわめて重要な心的事実であり、キリスト教信仰の最も本質的な象
徴的教義のひとつになっている。それは、たんなる自然にすぎない
人間の犠牲ということである。無意識的な、自然のままの生き物と
しての人間の悲劇は、すでに楽園でリンゴを食べたことに始まった
のである。聖書のあの墮罪からすれば、意識化ということは、ひと
つの餌でなくてはならない。事実、われわれをいっそう大きな意
識性へと強制し、それによって幼児的な無意識状態の楽園からなお
さら遠くへ押しやる問題は、どれもわれわれにとっては餌としか

ぬ経験で満足することができるであろう。しかし、文明人の精神生
活は、問題に満ちている。いや、問題性を抜きにしては、そもそも
考えることができない。われわれの心的事象の大半を占めるのは、
熟考や懷疑や実験であって、いずれも未開人の無意識的本能的な魂
が全くといってよいほど知らないことばかりである。問題性の存在
は、意識の発達によるものであるが、これは、トロイアの木馬に比
すべき文化の危険な贈物である。本能から逸脱し、本能にたいして
自己を対置することが意識を生みだす。本能は自然であり、自然を
欲する。それにたいして意識にできることは、ただ、文化を欲する
ことか、あるいは文化の否定を欲することではない。かりにルン
ー風の憧憬の翼をつけて、自然へ立ち返ろうとはばたいてみても、
意識は自然を「開化」するだけである。われわれがまだ自然である
かぎり、われわれは無意識である。問題のない本能の中で安心して
生きている。われわれの中であって、まだ自然であるところのすべ
てのものは、問題を恐れる。なぜなら、その名は懷疑であり、懐疑

思えない。問題からは誰も目を逸らさない。できれば問題には言
及したくない。あるいはいっそ、問題の存在そのものを否認した言
う。人生というものは単純で確実で平坦であることが望ましい。こ
ういふわけで問題はタブーとされる。ほしいのは、確実性であって
懷疑ではない。結果であって実験ではない。それでいて、確実性は
懷疑をおしてはじめて得られ、結果は実験をおしてのみ達成さ
れる、ということに分っていない。それだから、問題を巧妙に否認
することは、いかなる確信をも与えない。確実性や明確さを生みだ
すためには、むしろより高く高い意識が必要なのである。

このかなり長い前置きは、われわれの論題の趣旨を明らかにする
ために必要なものである。われわれは、ひとたび問題が生ずると、
本能的に、暗い不明瞭なところをくぐり抜けることを拒否する。わ
れわれは、ただはつきりした結果だけを聞きたいのだ。そのくせ、
この結果が得られるのはただ、われわれが暗闇を通り抜けたときだ
けであるということ、すっかり忘れていた。しかし暗闇を透過す
ることができるといふことは、われわれの意識に具わっている照明力の
すべてを動員しなければならぬ。すでに述べたように思弁まで弄
さなければならぬ。なぜなら、われわれは、心の問題というテー
マを扱うときには、いつも、実にさまざまな学問が自分の専門分野
として独占している根本的な疑問点に行きあたるからである。われ
われは、神学者や哲学者、医学者や教育者を困惑させ、あるいは立
腹させもする。いや、生物学者や歴史家の研究領域にまでこのこ
踏み込むことになる。このような常軌外れは、われわれの術学に発
するものではなく、人間の心というものが、諸要素の混合物であ

り、これらの諸要素が同時にまた広範にわたる専門諸科学の研究対象でもあり、という事情によっている。なぜなら、人間は、自分自身の中から、その固有の本性からその科学を生み出したからである。科学は、人間の心の現われにはかならない。

ここから、われわれは、なぜ人間が動物界とはまったく異なり、そもそも問題というものを持つているのか、という不可避の疑問を出すことになる。そうすると、無数の緻密な頭脳がこの数千年間にこしらえあげた解きたい思想の迷宮の中に入りこむ。私は、この迷宮にさらにシジュフォスの石を積み上げることほしない。ただ、この根本的な疑問に答えるうえで多少は役立つかもしれないことを、述べてみたいと思うだけである。

問題というものは、意識なしにはひとつも生じてこない。そこで、先の疑問は次のように言いかえなければならぬ。すなわち、人間がそもそも意識を持つようになったのは、いかにしてか？ 私はいかにしてそうなったのか知らない。最初の人間たちが意識するようになったその場に居合わせなかったからである。しかし、この意識化ということとは、今でもなお子供において観察することができる。親たちは、だれでも注意すれば、それを見ることができ。われわれが見てとれるのは次のようなことである。子供が誰かを、あるいは何かを識別するとき、われわれは、子供が意識を持ったと感じる。おそらく楽園の認識の木も、このようにして運命的な果実をつけることになったのである。

ところで、識別するとは、どういうことか。たとえば、新しい知覚を既存の関連の中に組み入れることに成功したとき、しかも、た性ととは、したがって、本質的にはさまざまな自我記憶の連続性であると言えらるであろう。

子供の意識段階はまだいかなる問題も知らない。子供自身がまだ両親に完全に依存しているため、主体に発するものは何もないからである。これは、あなたも子供がまだ完全に生まれておらず、両親の心的雰囲気の中に抱えられているようなものである。心的誕生、それと同時に両親との意識的な区別が生じるのは、普通思春期の性欲の活動開始をもってである。この生理的な革命には、また精神的な革命が結びついている。自我は肉体的な現象をとおしてひどく強調されるので、しばしば極端におのれを主張することになる。〈生意気盛り〉と呼ばれるゆえんである。

この時期までは、個人の心理は本質的に本能的衝動に従っており、問題性を含んでいない。この主体の衝動に外部から制約が加えられても、この抑圧は、個体の自分自身との分裂を引き起こすものではない。個体は外部からの制約に従うか、これを回避するか、いずれにせよ、自分自身とすっかり一致しているのである。個体はまだ問題的な状況における自己分裂というものを知らない。この状況は、外的制約が内的制約となると、すなわち、ある衝動が他の衝動にたいして拮抗するようになるとき、初めて生じるものである。これを心理学的に表現すれば、次のようになるであろう。問題的な状況、内的分裂が始まるのは、自我系列と並んで、これと同じような強度をもった第二の内容系列が成立するときである。この第二の内容系列は、そのエネルギーのゆえに、自我コンプレックスと同じ機能的な意味をもつものである。いわば、別の自我、第二の自我であ

んにその知覚だけでなく、既存の内容の幾つかのものを同時に意識のうちを持つことができたとき、われわれは、それを認識と言う。

したがって、認識は、表象された心的諸内容の関連に基づいている。関連のない内容は認識することができないし、われわれの意識がまだこのようなごく初歩的な段階にあるときは、そうした内容をまだ意識しているとは言えない。したがってわれわれの観察と認識にとらえうるかぎり、最初の意識形態なるものは、二つないしそれ以上の心的内容の関連にすぎないように思われる。この段階ではそれゆえ、意識はまだまったく二、三の関連系列の表象に結びついただけである。だからこの意識は、点在するにすぎず、後で想い出すことができない。実際、人生のこの最初の数年間には、連続した記憶というものは存在しない。灯火や照らされた物体が夜の広がりの中に点在するように、ここにはせいぜい意識の小島が存在するにすぎない。この記憶の小島は、しかし、あの最も初期の、ただ表象されただけの諸内容の関連ではない。ここには新しい非常に重要な内容系列が含まれている。すなわち、表象する主体そのもの、いわゆる自我の内容系列である。この系列もまた初めは、あの最も初期の内容系列と同様、ただ表象されたものにすぎない。その当然の結果として、子供たちは、自分について初めは三人称で語るのである。後になって、自我系列、いわゆる自我複合体が、おそらくは習熟によって、本来のエネルギーを発揮するようになって初めて、主体である、私である、という感じが成立する。これは、子供が自分について一人称で語り始める契機となるものである。この段階に至って初めて記憶の連続性が見られるようになるであろう。この連続

る。これは、場合によっては、第一の自我からその指揮権を奪い取ることがある。ここから自分自身との分裂、問題的な状況が生じてくるのである。

ここでこれまでに述べたことを手短かにふりかえってみよう。最初の意識形態、たんなる識別の形態は、無政府的な状態、混沌の状態である。第二の段階である発達した自我コンプレックスの段階は、君主主義的な態勢、一元的な態勢である。第三の段階は、さらに意識の進歩をもたらす。すなわち二重性の意識、二元的状況の意識である。

今ここに、われわれは、各年齢段階における問題性という本来のテーマに辿り着いたことになる。まず最初に青年期の問題性である。この段階は、思春期後期からそのまま始まって、およそ三十五歳から四十歳にかけての、ほぼ人生の半ばにまで至るものである。ところで、みなさんは、ここできつと次のような疑問を抱くことであろう。なぜ私が人生の第二段階から論じ始めるのか。まるで少年期には、ぜんぜん問題がないみたいではないか、と。子供は、正常な場合にはまだ問題がないのである。とはいえ、子供の心は複雑なもので、両親や教育者や医師にとっては第一級の問題である。人間は、成人となって初めて自分自身にとって疑わしいものとなり、自分自身と不一致をきたすことにもなるのである。

この年齢でのさまざまな問題の源は、だれもがすでに知っている。少年期の夢をしばしば突然打ち破るのは、ほとんどの人間にとって、人生の諸要求である。個人が十分な心構えをもっていれば、職業生活への移行は円滑に行われるものである。しかし現実とはま

るで反対の幻想がまだ続いていると、問題が生じてくる。いかなる臆断もなしに人生に踏み入る人はいない。これらの臆断はときにまちがっていて、われわれがいくわす外的条件に合わないことがある。すなわち、過大にすぎる期待とか、外部障害の過小評価とか、根柢のない楽天主義とか、否定的態度とかである。最初の意識的な問題を呼び起こすこれらのまちがった前提を数えあげていいたら長い表が出来上がるであろう。

しかし、問題を生じさせるのは、必ずしも外部の現実と主体の側の前提の抗争だけとは限らない。心の内部における困難であることもおそらく同じように多い。外面的にはすべてうまくいっているのに、実は内部に困難を生じていることもある。一番多いのは性衝動によって心の平衡を失う例だろう。また劣等感によって耐えがたい神経過敏を生じていることも少なくない。この内部葛藤は、外部適応が一見わけなく達成されているときにも、存続していることがある。いや、そればかりか、実生活との困難な格闘を強いられている若い人が内的な問題から免れ、むしろ適応が何らかの理由でいとも容易であった人が、性の問題や、劣等感の葛藤を起こしているようにさえ思われる。

問題を生じやすい人々は、きわめてしばしば神経症である。しかし、問題を抱えていることと神経症とを混同するならば、それは、ひどい誤解であろう。なぜなら、神経症の人は自分の問題性にたいして無意識であるがゆえに病気になるのに対して、問題を抱えている人は、自らの意識している問題に悩むけれども病気になるのではないからである。

他者になってしまい、それまでの私をあっさりと過去の中に消滅させるとしたら、どんなにかうまくいくことだろう。これはしごく歩きやすい道のように思える。実際、人間を未来の新しい存在に変え、古い存在を死滅させることは、古いアダムの衣を脱ぐ（生まれかわる）の意、ことに始まって未開民族の再生儀礼にいたるまで、宗教教育の目標となつているところである。

心理学の教えるところでは、心の中では古いものとか現実に完全に死滅してしまったものなどは、ある意味で存在しない。それどころか、パウロは肉中に刺をさしたまま（苦悩の去らぬ意）であった。新しい未知なものにたいして身を守り、過ぎ去ったものへと退行する人は、新しいものと自分を同一化させることによって、過去から逃げ出す人と同じ神経症的な状態にある。一方が過去から自分を疎外し、他方が未来から自分を疎外するのが唯一の違いで、両者は本質的には同じことをしているのである。彼らは、対立物を突き合わせることによって自らの意識の狭さを突破し、より広くより高い意識状態を築くかわりに、意識の狭さを守り抜くのである。

このやり方は、もし人生のこの局面で貫徹することができれば、理想的であろう。つまり、自然にとっては高い意識状態など全く何ほど重要ではないからである。逆に、社会集団というものは、このような精神の離れわざは評価すべきでないことを知っている。実際、社会はいつもまず第一に功績にたいして報いるのであって、人格にたいしてではない。人格をほめるのはたいしてその人の死後である。この事実からいやおうなく生ずる解決法が、たとえば自分の達成できることへの集中や、特定能力の錬磨であり、これは個人の

青年期の問題はほとんど無尽蔵なほど多様であるが、その中から共通の本質的なものを抽出してみると、この段階のすべての問題に付着していると思われるある特徴にであり。それは、程度の差こそあれ少年期の意識段階への明らか固執、われわれの内や外にあって、われわれを世界の中に巻き込もうとするさまざまな運命の力にたいする反抗である。何かがいづまでも子供であり続けたいと願っているのだ。全く無意識であるか、少なくとも自分の自我だけを意識してたいのだ。未知のものはすべて拒否するか、それがむりなら少なくとも自分の意志に隷属させたいと思うのだ。何もしないでいるか、しないわけにいかないなら少なくとも自分の快楽や権力は貫きたいと思うのだ。……ここには何か物体の慣性のようなものがある。これは従来からの状態の固執である。なぜなら、二元的な段階の意識性よりも狭く利己的である。なぜなら、二元的な段階においては、個体は、他者、すなわち未知のものをも同じように自分の生として、私でもあるものとして認識し、受容する必要にせまられているからである。

抵抗は、この段階の本質的な特徴である生の拡大にたいして向けられる。たしかに、ずっと以前からこの拡大、ゲーテの表現を使えば、生の Δ ディアストローレ（拡張）は始まっていた。この拡大は、すでに誕生のとき、子供がきわめて狭い母胎のかこいから外に出るときに始まり、それ以降休みなく輪を広げ、ついに問題のな情況において一つの頂点に達するが、ここで個体は、はじめて拡大にたいして防御を始める。

もしも個体があつたりと姿を変えて、私でもあるところの未知の

社会的業績能力の本質を成すものである。

業績、功利性等は、紛糾する問題から脱出する道を示すように思われる理想である。それらは、われわれの物質的な生活を拡大し安定させるための、われわれが世界の中に根づくための導きの星である。しかし、人間的な意識、すなわち文化と呼ばれるものをさらに発展させるための導きの星ではない。それはともかく、青年期にとつてこの道をとることは正常なことであつて、ただもう問題にとらわれて抜きさしならなくなるよりははるかにましなことである。

こうして問題は、過去をとおして与えられたものを、未来の可能性と要求に適合させることによって解決される。われわれは、達成可能なものへ自分を制限するのである。このことは、心理面では他のすべての心的可能性への断念を意味する。ある人は、これによって価値多い過去の一部を失い、他の人は、価値多い未来の一部を失う。誰しも、友人や同級生を思い出してみると、かつては将来を囑望された申し分のない若者が、それから何年かたつて再び会ってみると、無味乾燥で狭量な拘子定規な人間になっているのを見いだしたことがあるはずである。これこそそのような例である。

人生の大問題は、どれも決して最終的に解決できるというものではない。ときにはそう見えるかもしれないけれど、それはきまぐれで迷いである。大問題の意義と目的は、その解決にはなく、われわれが絶えずその問題に働きかけることにあるように思われる。このことだけが鈍化と硬化化からわれわれを防いでくれる。こういうわけで、達成可能なものへの制限をとおして青年期の諸問題を解決することは、ただ一時的に有効であるにすぎない。結局は永続的な有効

性を保てない。社会的な生存を闘い取り、程度の差はあれ、この生存形態に納まるように、自分の生れつきの本性を改造することは、いかなる場合にも全く立派な行為である。これは、内部と外部へ向けての闘いであり、少年期における自我の存在をもとめる闘いと比較できるものである。もちろん、あの闘いはわれわれにとつてたいていは暗闇の中で行われる。しかし、今われわれが、子供らしい幻想、臆断、利己的な習慣などが、後になってもお、いかに頑固に保持されるかを見るならば、過去においてそれらを生みだすために、どのような内的緊張がそこにふり向けられたかを測り知ることができよう。青年期においてわれわれを人生の中に導き入れ、そのためにわれわれが闘い、悩み、勝つところの理想、信念、指導理念、立場などについてもそれと同じことが生じているのである。それらはわれわれの存在と絡みあっている。われわれは見たところそれらのものに成りすまず。そして、少年が、その自我を世界とか自分自身にたいして、否でも応でも認めさせて行くときに示すのと同じ自明さをもって、われわれは、これらの理想、信念、指導理念、立場などを任意に継続して行くのである。

人生の半ばに近づき、自分の個人的な立場と社会的地位を固めることに成功すればするほど、人は、ますます正しい人生行路と行動の正しい理想や原則を発見したように思えてくる。そこで今度はそれらの理想と主義が永遠の妥当性をもつものと臆断し、そこに居座ることを美徳のように思いこむ。ここには重大な事実の見落しがある。社会的な目標の達成は人格の総体性の犠牲のもとに得られるものであるからだ。多くの、あまりにも多くの生が、これもまた生

きられることができたであろうのに、おそらくは記憶の物置きの中に埃をかぶったまま置き去りにされている。時にはまた速い昔に燃え尽きた灰の中に灼熱の炭が混っているものである。

統計によれば、四十歳前後の男性には抑鬱症状がかなりの頻度で見られる。女性では普通それよりいくらか早く神経症の障害が始まる。人生のこの段階、三十五歳から四十歳にかけての年齢層においては、人間の心にゆゆしい変化が準備されるのである。これはもちろん初めは、それとわかる顕著な変化ではない。むしろ、無意識の中に端を発すると思われるさまざまな変化の微かな前ぶれである。それは、ゆるやかな性格変化のようなものである場合が多い。ときには少年時代以来消えていた特徴が再び表面に現われたり、あるいは、それまでの好みや興味が薄れ始め、かわって別の好みと興味が出てきたり、あるいは——これはきわめて頻繁に見られるが——従来の信念や主義、とくに道徳的な信念や主義が厳しくかたくなになりはじめ、しだいに嵩じて五十歳頃には狭量な狂信主義にこりかたまることがある。その狂信ぶりは、あたかも、これらの主義がその存立を脅かされていて、そのために何はさておき自己主張をしなくてはならない、という印象なのである。

青春のワインは、壮年期になって澄んでくるとはかぎらない。時には濁ってくることもある。これらの現象はどれも、いくらか一面的な人々において最も良く観察することができる。この現象は早くから現われることもあり、遅く現われることもある。私の見たところでは、その人の両親がまだ生きている場合には、発現が遅れることが多い。これは、あたかも青年期が不当に長く引延ばされたよう

なものである。私が、見てきた男性たちの場合、父親が長く存命していて、その父親が死ぬと、それを契機に、いわば破局を迎え、大急ぎで成熟がもたらされるようである。

私は、教区委員長をしていた信心深い男性を知っている。この男性は、ほぼ四十歳を境にして、耐えられない道徳的宗教的厳格さにとられるようになった。それにつれて彼の心は見るみる陰鬱になった。彼は最後には、ただもう無気味な感じを与える教会の柱像でしかなかった。こうして四十五歳を迎えたある時、真夜中に彼は突然ベッドに起き上がり、妻君に向かって言った。「今わかったぞ。俺はもともとところつきなのだ」。この自己認識は、実生活でひどい結

果を見た。彼は人生の最後の年月を歓楽に費やし、財産の大部分を蕩尽した。これは、まさに、両極端に奔ることのできた、いくぶん同情をそそる人間である。

壮年期に非常に頻繁に見られる神経症的障害には、みな共通する点がある。すなわち、それらの障害は、有名な不惑の年、四十歳の敷居を越えてもなお青年期の心理をもち続けようとするのである。いったい、あの感動的な老紳士たちを知らない人がいるだろうか。この先輩たちは、学生時代を繰り返し暖めなおさないではいられない。彼らは、自分たちのホメロスの英雄時代を回顧することによってしか生の炎を燃え立たすことができないのである。もちろん、



C. G. ハンソン (1960)

彼らには普通軽視できない長所がある。彼らは神経症ではなく、常日ごろただ退屈で型にはめられた生活をしているにすぎないのである。

神経症の人間は、彼が望んでいるようには現在が成り行かない人間であり、したがってまた過ぎ去ったものを楽しむことができない。彼は、かつて少年期から離れなかったように、今は青年期を脱することができない。彼は、どうやら老化という灰色の想念の中に自分を入れて見ることができないで、将来の展望に耐えられないために、発作的に後をふりかえるのだ。子供らしい人間が、未知の世界と人生を前に恐れをなして尻込みするように、大人もまた人生の後半期を前にして後退りするのである。あたかも、ここには、未知の危険な課題が自分を待ちうけているとか、受け容れることのできない犠牲と損害の危険がさし迫っているとか、あるいは、自分にとってそれまでの人生があまりにも美しくあまりにも貴重なものと思われるので、これを失うことはできないとか、言わんばかりである。

これは、もしかすると究極的には死への恐れであるのだろうか。私にはそのようには思えない。普通、死はさらに遠い先のことであり、したがってやや漠然としているからである。経験の教えるところは、むしろ、この過渡期に現われるすべての障害の原因と理由は、心の深層における注目すべき変化である。このことを判りやすく示すために、私は、毎日の太陽の運行に替えてみる。この太陽が、人間的な感情と人間的な瞬間の意識を具えているものと考えてみよう。朝になると、この太陽は無明の夜の大海から昇ってくる。

いかな点でも男性的な特徴を示すようになることが知られている。逆に、男性の肉体的な外観は、脂肪ぶとりとか容顔の穢やかさといった女性的な特徴によって和らいでくる。

文化人類学の文献に、武人でもあるインディアンのある酋長について興味深い報告が掲載されている。人生の半ばにしてこの男の夢に大いなる守護霊が現われ、告げることには、酋長は今後女子供と起居をともにし、女の衣装を着け、女の食物を食べなければならぬ、というのである。酋長はこの夢の霊のお告げに従ったが、彼の声望を失うことはなかった。この夢は、心の正午革命、すなわち下降の開始の正確な表現である。もろもろの価値、いや肉体までもがその反対物になってしまう。少なくともその前兆ではある。

この男性的なものと女性的なものはその心的諸特徴をも含めて、例えば、一定量の貯蔵物質にならざるべからざるであろう。この物質は人生の前半期にはいわば不均等に消費されるのである。男性は、男性的な物質を大量に消費し、これから使える分に少量の女性的物質をかりうじて残すのみである。女性の場合は、反対に、それまで利用されないうちの男らしさの在庫をこれから活動させることになる。

この変化は、肉体的なものにおけるよりも心的なものにおけるほうが顕著である。たとえば、夫が四十五歳から五十歳に至る間に破産したあと、妻がかいがいしく小さな雑貨店を営み、そこで夫がおそらくは手伝い仕事をするというようなことは、しばしば見うけられる。婦人たちは、概して四十歳を過ぎてようやく社会的な責任と社会的な意識に目ざめる場合が非常に多い。たとえば、現代の実業

そして天空高く昇るにつれて、太陽は、広い多様な世界がますます速く延び広がって行くのを見る。上昇によって生じた自分の活動範囲のこの拡大の中に、太陽は自分の意義を認めるであろう。そして最高の高みに、つまり自分の祝福を最大限の広さに及ぼすことに、自分の最高の目標を見いだすであろう。この信念を抱いて太陽は予測しなかった正午の絶頂に達するのである——予測しなかったというのは、その一度限りの個人的な存在にとつて、その南中点を前もって知ることができないからである。正午十二時に下降が始まる。しかも、この下降は、午前のすべての価値と理想の転倒である。太陽は矛盾に陥る。それは、あたかもその光線を回収するようなくあいである。光と暖かさは減少して行き、ついには決定的な消滅に至る。

比較はすべて不十分でしかない。太陽の比喩も、少なくともこの点では他の比較とかわるところはない。この比較の真理をシニカルな諦め顔で要約したフランスの警句がある。いわく「青年にして知あり、老年にして力ありせば。」

幸いなことにわれわれ人間は太陽ではない。さもなくば、われわれの文化的な価値の数々は具合の悪いことであろう。しかし、われわれの中には何か太陽のようなものが存在している。それで、人生の朝と春、夕べと秋は、ただの感傷的なおしゃべりではなく、心理学的な真理である。いやさらに言うなら、心理学的な事実である。なぜなら正午の革命は、肉体的な諸特徴までも逆転させるからである。とくに南方の諸民族においては、中年の女性は、声がしわがれて低くなり、口ひげが生え、顔つきがかわり、他のいろいろ

界、とくにアメリカでは、四十歳すぎでいよいよゆるブレイク・ダウン、神経衰弱は、たいへん頻繁に見られる現象なのである。これらの犠牲者を詳しく診察してみると、挫折したのはそれまでの男性的な生活態度であり、生き残ったのは女性化した男性であることがわかる。こういう社会ではまた逆に、この年齢の婦人を観察していると、著しい男性的特徴と鋭い知性を発揮し、心と感情を背後に押しやっている婦人たちがいるものである。このような変化には、きわめてしばしばあらゆる種類の結婚生活の破綻がついてまわる。実際、夫が自分のやさしい感情を、妻が自分の知性を発見したあと、一体どんなことになるか、想像することはさほど困難なことではない。

これらすべてのことにおいて最も困ったことは、賢い教養のある人々が、このような変化の可能性を知らずに、日を送っていることである。彼らは、全然心の準備をしないで人生の後半期を歩み始める。それにしても大学以外の、四十代の人々のための高等教育機関がどこかにあるだろうか。ちょうど普通教育と高等教育が若い人々に世界と人生の知識を手ほどきするように、そのような学校においては、人々に将来の生活とその必要事項について予備知識を与えることになるだろう。いや、われわれは、心の深層においてはいかなる準備もしないで、人生の午後に踏み入るのである。なお困ったことには、そのさい、われわれはそれまでの真理と理想についてのまじがった臆説をそのまま持ち込むのである。人生の午後は、午前と同じプログラムで生きるわけにはゆかない。なぜなら、午前には山であるものが、夕べには塵となり、午前に真であるものが、夕べに

は真でなくなるであろうから。私はこれまでに非常に多くの年とつた人々を診察し、彼らの心の小部屋を覗きこんで、この根本法則の真理に衝撃を受けないではいられなかった。

人生の午後にいる人間は、自分の人生が上昇し拡大するのではなく、仮借ない内的過程によって生の縮小を強いられるのだということとを悟らなければならぬであろう。青年期の人間にとって、自身自身に打ちこみすぎることは、もうほとんど罪である。そうでないにしても少なくとも危険である。老いつつある人間にとっては、自分の自己にたいして真剣な考察をささげることが、義務であり必然性である。太陽は、その光をひとつの世界に惜しみなく降り注いだあとは、自分自身を照らすためにその光線を回収するのである。そうするかわりに、多くの老人たちは、気で病む病人、吝嗇家、やかまし屋、過去の賛美者、あるいはさらに永遠の少年になることへのほうを好む。これこそ、自己照明をしないで済ますための哀れな代償行為であるが、またしかし、人生の後半期は前半期の諸原則によって治めなければならないとする妄想の必然の結果でもある。

私は、今しがた四十代の人々のための学校がないと言ったけれど、これは、必ずしも正しくはない。われわれの宗教は、古来そのような学校である。少なくともかつてはそうであった。しかし、どれほど多くの人々にとって宗教は今もなおその機能を果たしているか。われわれ中年の人間のうちどれほど多くの人がこのような学校で現実には人生の後半期の秘密、すなわち老年、死、永遠のための教育を受けているであろうか。

人間というものは、もしその長命が人間という種の意義に一致し

理想となっている。

こうした錯誤の原因が、どの程度まで、過去における過大な権威主義にたいする反動によるもので、どの程度まで、まちがった理想によるものであるのか、私にはわからない。ただこの理想がまちがっていることは疑いない。これらの人々にとってゴールは前方にはない。後方にある。だから彼らはそのゴールを求めて逆もどりを試みる。彼らの努力は認めなければならない。人生の後半期には、前半期とはいかにちがった目標がなければならないかを理解することは難しいからである。生の拡張、功利性、効率の良さ、社交における格好の良さ、手まわしよく子孫につりあいのとれた縁と良い地位を見つけてやること——いかにこれらは十分人生の目的たりうる。しかし、年を取ることのうちにただもう生の目減りしか認められず、以前のさまざまな理想を色褪せ使い古したものとしか感じることのできない多くの人々にとって、これは、残念ながら満足のゆく意義であり目的であるということにはならない。たしかに、これらの人々が、もしそれまでにすでに彼らの生の水盤を溢れるまでに一杯に満ちし、すっかり空になるまで使いはたしていたならば、今はおそらく別の感じ方をするであろう。彼らは手許には何も留め置かなかつたであろう。燃えようとすることは、すべて燃え尽きていくであろう。そうなれば、老年の静けさこそ彼らの歓迎するところである。しかし、われわれが忘れてならないことは、人生の芸術家であるのは、ほんの少数の人々に限られ、加うるに、人生の芸術は、すべての芸術の中で最も高貴で最もまれなものであるということである。——生の杯をすべて美神にささげる。誰にそのようなこ

ないならば、きつと七十歳、八十歳の高齢に達することはないであろう。それだからこそまた人生の午後にはそれ独自の意義と目的があり、単なる午前の哀れな付録ではありえないのである。午前の意義が、個体の発展、外部世界における定着と生殖そして子孫への配慮であることは疑いを容れない。これは、判然とした自然の目的である。しかし、この目的が達成され、いや十二分に達成されたあとでも、なお金儲けに奔り、征服行為を続行し、生存範囲を拡張させることは、まともな感覚を通り越してさらに先へ進むことになるのではないだろうか。このようにして午前の法則、すなわち自然の目的を人生の午後まで故なく引きずり込む人は、そのために心の損害という代価を支払わなければならない。それは、ちょうど、子供じみた利己主義を壮年期にまで大切そうに持ちこむ少年が、その思い違いを社会的な失敗という形で清算しなければならぬのと同じことである。金儲け、社交生活、家族、子孫といったものは、まだ単なる自然であって、文化ではない。文化は、自然の目的の彼岸に存するのである。それでは、文化は人生の後半期の意義にして目的でありうるだろうか。

たとえば、未開民族においては、ほとんど例外なく老人たちが密儀と掟の番人であることが知られている。そして、なによりもまず彼らのうちにその民族の文化が表現されているのである。われわれにあつては、この点はどうなっているか。われわれの老人たちの知恵はどこにあるか。彼らの秘儀と夢の幻はどこにあるか。むしろ老人たちは、若者たちと張り合おうとしている。アメリカでは、父親は息子の兄弟、母親はできることなら娘の妹であることが、いわばとができるであろうか。こうして、多くの人間にとっては、まだ生き尽くしていないことがあまりにも多く残されていることになる。——それは、彼らがどんなに望んでも生きることのできなかったであろう可能性であることもある。こうして、彼らは、果たされなかった要求を抱いて老年の敷居をまたぐ。すると思わず知らず彼らの眼差しは過ぎこし方に向うのである。

このような人間には回顧は、とりわけ危険である。彼らには前方への展望、将来の目標が不可欠である。だからこそすべての偉大な宗教には、彼岸の約束、超現世的な目標があり、これによって空蟬の人間は、人生の後半期を前半期と同じように目標をめざして生きることが可能になる。しかし、今日の人間にとっては、生を最高点にまで拡大させるという目標が、きわめて自明のことであるため、死後の生の継続という理念は、どのような意味のものであれ、疑わしく、全く信すべからざるものである。それにしても人生の終り、すなわち死が、まともな目標となりうるのは、ただ次の場合だけである。人生が悲惨きわまりないものであるため、そもそも終息することこそ真に喜ばしいという場合か、それとも、太陽が正午に向けて上昇すると同じ必然性をもって、すなわち急速に世界の衆生に光明を与えるために、下降を求めるときである。ところで、信じていることができるということは、今日ではまことに難しいわざとなり、とりわけ教養ある階層にとってはほとんど近寄り難い事柄となつていく。われわれは、不死とかその種のことについては、さまざまな矛盾する見解があり、納得の行く証明はひとつもない、という考えにたいそう親しんでいる。この時代の、見受けるところ絶対

の説得力をもつ標語は、科学である。そのため、われわれは科学的な証明を好むのである。しかし、教養人の中でも、考える人々は、このような証明は、哲学上の不可能事のひとつであることをよく知っている。それ以上のことは、一般に何も知るべきでない。

それにしても、死後にやはり何かあるのではないかと、これは、これも同じ理由から知ることができないということも、指摘されてよいではないか。その答えは、肯定するにも否定するにも、証拠不十分である。これについて科学的に確かなことは、なにひとつない。この点、たとえば、火星に人が住んでいるかどうかという疑問と同じ事情になる。もちろん、これは火星に人がいるとしてのことであるが、その火星人にとって、われわれが彼らの存在を肯定するにせよ否定するにせよ、それは全く何の意味もなさないことである。彼らは、存在するか、それとも存在しないかである。いわゆる不死の問題もこれと同じことであり、われわれは、この問題を取り下げてよいであらう。

しかし、ここにおいて私の医師としての良心が目ざめ、この疑問にたいしてなおぜひ必要なことを言わないではいられない。というのは、私のこれまでの観察では、目標志向的な人生のほうが目標のない人生よりも一般により良く豊かで健全であり、また、時間とともに前進するほうが、時間に逆行するより良い、ということである。心の医師にとって、人生と別れられない老人が軟弱で病的に思われるのは、人生を建設することのできない若者の場合と同断である。事実、前者においても後者においても、問題は、多くの場合、

あろうか。われわれが理解する思考とは、われわれが投入した以上の以上は出てこない、という方程式にはかならない。これが知性である。これを越えるものとして、原像や象徴における思考がある。これらの象徴は、歴史時代の人間よりも古くからあり、始源の時代以来人間に生れながら具わっていて、すべての世代より長生きし、永遠の活力をもってわれわれの魂の基底を満たしているのである。完全な生は、これらの象徴と調和することによってのみ可能である。これらの象徴のもとへ帰還することは賢明である。肝腎なことは、実は信仰でも知識でもない。われわれの思考がわれわれの無意識の原像と調和することである。なぜなら、どんな思想もわれわれの意識がさんさん苦勞したあげくにやっと考え出すことのできるものにはすぎないが、これらの原像はあらゆる思想の思いも寄らぬ生みの母だからである。そして、これらの根本思想のひとつが、死の彼岸における生の理念である。科学の尺度ではこれらの原像を測定できない。これらの原像は、想像力に生得の *phantasy*、非合理的な与件であり前提であって、ただ、そこにあるというばかりである。科学は、これらの合目的性を後から *a posteriori* 探究して、これを認定することしかできない。ちょうど、たとえば、十九世紀になるまでは無意味な器官としてしか説明のつかなかった甲状腺の機能のようである。原像は、つまり、私にとって何か心の器官のようなものであり、私はできるかぎりその世話をしやるのである。だから、たとえば中年のある患者には次のように言わなければならぬ。「あなたの神の像、あるいは、不死の理念は、萎縮しています。そのためあなたの心の物質代謝は、常軌を逸しているのです。」

同じ子供じみた貪欲さであり、同じ恐れであり、同じ反抗心とわがままである。私が医師として確信していることは、死の中に努力の対象となるべき目標を認めるほうが、いわば衛生的であり、死への抵抗は不健康で異常なことであり、そのわけは、死への抵抗が人生の後半期からその目標を奪い取るようになるから、ということである。それゆえ、私は、魂の衛生という立場から見た場合、すべての宗教が超現世的な目標をかかげていることをきわめて理にかなったことと考える。もし、私が、この半月以内に倒壊することを知っている家に住んでいれば、私の生活能力はことごとくこの想念に妨害されるであらう。それにはたいして、私が安心の境地にあれば、私は、その中で落ち着いて普通に暮らすことができるであらう。だから、もし、われわれが、死はひとつの過渡であるにすぎない、いかに大きく長いか測り知れない生の過程の一部にすぎないということを考えてみる事ができるならば、それはまさに魂の医師の立場から見ても喜ばしいことである。

一般にはとどの人間は、身体が何のために食塩を必要とするのかを知らないけれど、みな本能的な欲求から食塩を要求するものである。心の事柄も同じことである。一般にはとどの人間は、古来、永生への欲求を感じとっていた。この事実を確認することによって、われわれは、人類の生という長大な銀河系のただ中に位置するのである。これを離れるのではない。それゆえ、われわれは、かりにわれわれが何を考えているかわかっていないとしても、生きるという意味においては正しく考えているのである。われわれは、そもそも自分が何を考えているかを理解しているで

と。古来のバルマコン・アタナシアス、すなわち不死の妙薬は、われわれが考えていたよりずっと意義深く測り知れないものである。最後にもう一度少しばかり太陽の比喩に触れてこの講演を終りにしよう。人生という百八十度のアーチは、四つの部分に分けられる。東に上る最初の四半期は、少年期である。これは、問題のない状態である。そこでは、他人にとって問題であるにすぎない。自身の問題性はまだ意識していないのである。問題性の意識は、第二・四半期と第三・四半期にわたるものであり、最後の四半期である老年期には、われわれは、自分の意識状況には無頓着になり、またしてもむしろ他の人々にとっての問題となる状態に再び沈みこんで行く。少年期と老年期は、たしかにきわめて異なっている。しかし、一点において共通である。すなわち、無意識な心的なものの中に浸っていることである。子供の心は無意識の中から出て発展を始める。そこで子供の心理は、多少のむりはあってもやはり、無意識の中に再び沈み行き、次第にその中で消滅する老人の心理と同様に考えることができるのではなからうか。少年期と老年期は、人生における問題のない状態である。そのため、私はこの二つの段階をここでは考察の対象から外したのである。

(かまたてるせ・ドイツ文学)

Title: Die Lebensende in Selbstdarstellung des Gegenwart, 1946.

Author: C. G. Jung.